

残してきた足あと

富山県 表 シゲ

渡 満

富山県荏河開拓団第一次、五世帯十三人の出発祈願祭は、昭和十八年四月十三日、氷見市日の宮で執り行われ、国鉄氷見駅に向かいました。

その日は、もう桜の花便りがすぐそこまできているのに、その後の苦難を暗示するかのように十センチも雪が積もり、わら草履に履き換えてお参りしました。駅には、家族や親戚、知人三十人ほどが、「息災で、元気に頑張られ」と涙ながらに手を振り、ささやかな見送りでした。

蒸気機関車が、汽笛一声、ガタン、ゴトンとホームを離れていくと、悲しい別れに涙がとめどもなく流れ、大声で泣き伏す人もありました。汽車は途中夜行となり、トンネルを通るたびに煙に悩まされ、門司に着い

たときには顔も着物もすすだらけでした。

門司に一泊し、船に乗りましたが、出航してすぐに大荒れになり、皆船酔いをして、玄海灘を渡るころには船室を駆け回り、全員が手をつないで一昼夜を過ごし、釜山に上陸しました。釜山では旅館に一泊し、一人前一円三十銭の寿司を注文して、夜は宴会になりました。

そして、「これからは全員がそれぞれ親や兄弟と思いい、他人の子供も自分の子と思つて苦楽を分かち合い、頑張つて行こう」と決意を固めたのです。

釜山から三日間汽車に揺られて安東へ、安東で一泊し、軍用トラックの荷台に三昼夜揺られ、安東省荏河^{せいがわ}県青堆子の団本部に、そこから二キロほど離れた入植地に向かい、開拓団の生活が始まったのです。

歓迎

トラックが屯に着くと、大勢の現地の人たちが集まつており、最初は物珍しそうに見ていたのですが、そのうち、にこやかに話し掛けてきて、モンペに前掛け姿、草履ばきの私たちに、頭といわず体中、ところ構わず

触れてくるのです。私たちは、何をされるのかとガタガタ震えておりましたが、それは歓迎の挨拶で、そんな歓迎にも不安をかりたてられたものです。

荏河県の氣候

荏河は南滿に近く、それでも冬は、零下二五度を超えることがあり、冬の空は外に出れば凍死しかねません。まつげが凍り付き、夜間外出すれば凍死しかねません。冬は九月末から薄氷が張り、十一月末にはツルハシでも掘れない極寒の凍土となります。四月に入ると突然のように暖かくなって一度に春がやってきます。春は柳の芽ぶきに始まり、その後アンズが桃色の鮮やかな花を付け、甘い香りを撒き散らします。同時に土色の大地は黄緑色のジュータンを敷き詰めたように、どこまでも、どこまでも若草色に覆われるのです。タンポポが多く、柔らかい草はほとんど炒めて食べました。五月の末から六月中は大變過ごしくい長梅雨で、ほとんど外出さえできません。というのは、道はぬかるみに足を取られると、「ゴボツゴボツ」と体ごと吸い込まれて底無し沼のように、人も馬も動けなくなっ

てしまうのです。

夏は四時に夜明けを迎え、午後八時に夕日が沈むまで、ギラギラと太陽が輝き、日暮れには、タライのような真つ赤な太陽が手に取るくらい近くに見え、地平線の彼方に沈んでいきます。

八月十五日を過ぎると、一足飛びに冬に向かい、収穫の終わった畑には、とどころに穀物保存の藁ボックリが積まれ、そんな短い秋には、大空をシベリアからの雁の群れが幾重にも渡っていきます。その雁の群れを見て、「あの群れが皆、日本に向かって行くのかな」と思うと、その美しさに見とれながら、ひとり涙したものです。

入植地の生活

水見荏河開拓団入植地は、周囲一面見渡す限りの大平原で、ちょっと小高い丘のような盛り上がり、丘の裾野や溝のような所はアンズ、ナツメ、柳の木がわずかに生え、大地は無限のように思えます。そんな土地に永住するためには、継続的な食料確保が緊急の課題でした。

生活する上で、便所や風呂はありませんが、二間四方の土間だけの狭い住宅に、暖房用のオンドルがあり、家から五百メートルほど離れて井戸もあります。配給の米や塩、味噌、醤油や酒まで豊富にあり、農機具の鍬や鋤も団本部から配給を受けました。

さっそく中国人の苦力クワリに、農作物の作り方の手ほどきを受け、人力も馬も借りてトウモロコシとコウリヤンを植えました。

その年は、一応の収穫もあり、五世帯十三人の来年度の食い繋ぎのメドも立ったのです。

第二次開拓団出発

昭和十八年九月、私は長男出産のため一時帰国しました。ところが生後十三日で黄疸を患い急死してしまいました。

そのころ、水見では開拓団第二次団員募集中で、地区の区長の家で、開拓団に関する説明会が行われました。私は現地経験者としてその席に呼ばれ、あらかじめ「都合の悪いことは話さないように」とクギを刺されていたので、その説明に大変困ったものです。

私は、長男を亡くし悲観的な気持ちになっておりました。しかし、悲壮なまでの決意を固め、外地に渡ったことを思うと挫折は許されず、昭和十九年四月二十三日、第二次団員八十余人と共に再度渡満したのです。開拓団は第二次団員を迎えて、にわかに賑やかになり、子供たちを集めて学校もできました。

そんなとき、夫が家にかえってくるや、「本部で豚が子を生んだんじゃ。すごいもんじゃのー、十二匹も産んだがい」と言ってお喜びしていました。そんな嬉しい話などめったにあるものではありません。厳しい冬も何とか乗り越えました。

昭和二十年春には一世帯二町歩の水田と、三町歩の畑が割り当てられました。そして、苦力や苦力が連れてきてくれた親戚の者の手を借り、やっとの思いで植え付けを終えたのです。そんな一段落ついた折、突然、夫に現地兵役召集の赤紙がきたのです。団の働き手である若い者は皆召集され、残った者で田畑を耕作するしかありません。満州の広野では作業はすべて共同で行いますが、一世帯五町歩の田畑は、とても人力では

かないません。そこで各世帯が個人で馬を持つことにしたのです。

当時馬一頭は五百円で、私は出国する際準備してもらった二百円のほか、ほとんど貯えがありませんでした。私は途方に暮れ、難題を承知で実家の父に「夫が召集され、このまま満州で生活するにはどうしても馬がいる。馬一頭を持ったら、皆と一緒に仲間入りできる。なんとかお金の工面をしてほしい」と、何度も泣きついたので。

父は、為替でそのお金を送ってきてくれましたが、それこそ血の出るような思いでお金を作ったことを思うと、ただただ涙を流さずにはおられませんでした。その年は大豊作で、見事なまでのコウリヤンや米、すばらしいトウモロコシが収穫を前に風に波打ち、毎日楽しみに眺めておりました。

終戦

私は、家の苦力を「ニイヤ」と呼んでいましたが、ニイヤが時々自分の家から野菜や豚肉の角切を持ってきてくれるのがとても嬉しく、感謝していました。そ

んなニイヤが、収穫を間近にひかえた昭和二十年八月九日、私の家にやってきて、「リーベン ファンクライ（日本ひっくり返る）、ジャングイ スーラ（旦那さんは死ぬ）」などと言いつたのです。よく聞いてみると、「今、奉天がソ連に攻撃され、日本は戦争に負ける。タイタイ（奥さん）一人ではどうすることもできないし、ジャングイは帰ってこない。持っている荷物は全部置いていくしかない」と言うのです。

私は日本が戦争に負けるなどとは考えたこともなく、突然変なことを言い出す、と思っていたのですが、「外に出て音を聞いてみる」と言うので、外に出てみると確かに「ズズーン、ズズーン」と地鳴りのような音がするのです。それでもそのことが、すぐに日本の敗戦と結び付けることができず、「話は分かったが、ジャングイが帰ってこない」と荷物は処分できない」と即答しなかったのです。

するとニイヤは、「タイタイはバカだ」と言い残して、肩をいからせ帰っていくので、「これは確かにおかしい。どうしても胸騒ぎがして変だ」と直感し、急

いでニイヤを呼び返しました。そして、「ジャングイの着物は持っけていても仕方がないし、いろんな荷物も一人で持っけていてもどうしようもないから、助けると思って、目一杯の値段で引き取っけてくれ」と言っけて、夫の配給品の衣服を中心に、ほとんどの荷物を五十円で売っけてしまいました。ニイヤは大変喜んで帰っけて行きました。ラジオも新聞もなく、戦争の行方も分からないまま、いぶん無茶な行動をとったものです。

ニイヤは、十日も「まだ分ける物がないか」と言っけてきて、私は自分の着物と食料を残して、布団から鍋釜もほとんどの物を二十円で売っけてしまいました。

それを見た団員の奥さんに「そっ、何するがいアホな、明日からどうするがい」とたしなめられました。

私は、ニイヤの言っけて「日本が戦争に負ける」という話を奥さんに説明したのですが、聞き入れられるわけがありません。

そんなことがあっけて、八月十一日ころから、ほかの苦力たちの態度に変化が見えはじめ、団員を無視したり、軽蔑の目で見下すようになりました。そんな折、八月

十四日、夕方になっけて団本部から苦力を通じて「明日十五日全員が団本部に集合するよう」との連絡があっけてたのです。そのときは「弁当でも持っけていかんらんなかのー」「腹へると思っけて持っけて行きやよかろうがい」などと、のどかに話っけていました。

十五日、午前十一時ころ、団本部に着くと、二十人ほどの団員が集まっけており、「何やっけてかかのー」と話っけて合っけていました。そして十二時過ぎになっけて「さっきラジオ放送があっけて、日本が戦争に負けた」と聞かされたのです。

その報告を聞いて、「そんなバカな、まさか」などと皆、あっけてにとられていました。だれかが泣き出し、報告した団長も泣き出し、集まっけてた者も事態の重大さが分かって全員その場に泣き崩れたのでした。

その場はいっけてまで経っけても皆泣きやまず、そのうちだれかが、「泣いっけてもはじまらん、早くここから出て避難せんにか」と言っけて、ようやく我にかえり、各自の家に飛んで帰っけてたのです。家に帰ると、すでに中国人の略奪が始まっけていました。最初は留守の家に

上がり込んで金目の物を片っ端から盗み出していたのですが、しまいには人がいても、壁を突き破ってまで家の中の物を盗み出して行きました。

私の家には何もない状態だったので、私はお金だけを肌身離さず持っていたのです。

それでもニイヤが、私がお金を持っていることを知っているのです、いつ取りにくるかと心配し、もし取りにくれば、持っていた柳庖丁で差し違える覚悟でおりました。

逃避行

突然の終戦に、今後の対応や、打ち合わせを繰り返しますが、降って湧いた事態で収拾がつきません。そうこうしているうちに八月十九日、軍から二台のトラックが回されるというので、全員持てるだけ、担げる限りの荷物を持って団本部に向かいました。

私はほんの少しの煎り豆と、トランク一個に母親からもらったベンベルグの着物、父親に八十円で買ったもらったコートと紋付きなどを詰め込んで持ち出ししました。ところが途中のコウリヤン畑の中にはあちこち

に中国人が待ち伏せており、ほとんどの人は着ている物以外は全てを奪われてしまいました。私もトランクはもちろん、腕時計も引きむしられそうになったので、素直に渡してしまいました。

荷物のほとんどを失い、団本部に着くと、そこには中国人の男が三百人以上も集まっており、皆両腕を前に組んで、二台のトラックをガヤガヤ騒ぎながら取り囲んでいるのです。

何はともあれ幌のない軍用トラックに、百二十人ほどの団員が「早く早く」とせきたてられてすし詰めに乗り合わせたのです。

トラックはすぐに走り出し、その荷台から振り返って見ると、毎日毎日祈るように育てたコウリヤンや米、トウモロコシがたわわに実り大きく波打っていました。しかし一粒も収穫しないまま、夢と希望の開拓団を後にしたのです。

「収穫が終わったら、みんなで安東の街へ買い物に行こう」と楽しみに語り合ったことをぼんやり頭に浮かべていました。

差し当たりの行き先は、百四十キロ離れた安東で、その先は皆目見当もつきません。

トラックは丸一昼夜ガタガタ道を走り続け、疲れ果てた体を休めようと、小さな屯を見つけ小休止しました。ところが全員トラックから降りたとたんに、ソ連兵数人が銃を構えて待ち受けており、その場でトラックは無論のこと、運転手や助手の十人ぐらいの者がソ連兵に連れ去られてしまったのです。

トラックを奪われ、満州の大地に取り残された避難民には、八月末とはいえ夜は寒さにふるえ、昼間は残暑の太陽が照りつける中ではなす術がありません。そうしているうちに、中国人が集まってきて、「今まで勝手放題していた日本人なんか、放っておけ」という者が多かった中、その屯長が「年寄りと女、子供だけでこんな所に放って置いたら死ぬだけだ。死んだらよけい困る」と丸一昼夜かかって村人を説得し、結局十五台の馬車を準備してくれたのです。

しかし食料が残っておらず、一日一食、しまいには三日に一食に切り詰め、水たまりでは泥水をすすって

七日間かかり、安東にたどり着きました。

その後の話で、確かめることはできませんが、私たちを送ってくれた中国人や屯長は、日本人を助けたというところで、八路军に全員銃殺されたことを收容先で耳にしました。

收容所の生活

安東の街では、さっそく全員が收容所に入れられ、そこで莊河開拓団はバラバラになってしまいました。私が收容されたのは旧満鉄のエキサイ寮で、そこには満州各地から逃れてきた避難民千二百人が收容されていました。

寮は赤煉瓦造りの四階建てで、二階から上は爆破されて床も階段も壊れ、ガラスは破れ、水道、電気は引かれていましたがすべて壊れて使えず、便所はすでに許容量を超え、寮周辺は全体が便所と化したのです。

そしてコンクリートの土間に、一人半畳ほどの座るだけが目一杯の生活の場が与えられ、そこに麻袋や毛布を敷いての長い收容所生活が始まったのです。收容所の外は、中国人はもとより、ソ連人、朝鮮人がこった

返しており、特にソ連人は、女と見れば路地へ引っ張り込んで強姦し、男に対してはリンチ、略奪で、うっかり外にも出られません。

そこでの食事は、マントウ、チュンメン、コウリヤン、トウモロコシのおかゆなどが主食で、白菜の塩汁を添えた一日一食の生活です。

町は戦勝気分で湧き返っていましたが、日本人は略奪などを恐れ、わざと髪と髭をぼうほうに伸ばし、こじき同様の格好をし、女は顔に炭粉や泥を塗り、頭を坊主に刈って汚れた衣服にさらに泥を塗って変装して外出しました。私は終戦直前、苦力に荷物を売って作った七十円のお金で、大福やコウリヤン餅を買い、物陰に隠れて一人意地汚く食べ、生命をつないだのです。

そんな中で、収容所では不衛生と栄養失調から伝染病、皮膚病が蔓延し、十月ころからは最初に赤子、次には年寄りと、体力のない者から順次、毎日のように十人以上もの死者が出たのです。それもそのはず、寮の内外は糞便であふれ、毛布や衣服も体中シラミだらけなのです。シラミは、日中陽が射すと毛布からバラ

バラと落ち、夜になるとその卵が孵^かって、またシラミとなるのです。

そんな中で死んでいった人たちは、シラミだらけの毛布にくるまれ、男手で外に運び出され、谷間の凹みに集められ、捨てられるように放置されたのです。寮の生活環境は、その後あまりの衛生状態の悪さから、次第に寮を出る人が目立ち、そして一度寮を出た人たちは、その周辺でアンペラで囲んだ屋台や煙草売り、古着屋、廃品回収、こじきなどを始め、日本人街を作り始めました。

そんな十月初めごろ、私は大阪出身の玉村という女医さんの世話で、長崎出身の牡丹江木材の重役の家に女中に行くことになりました。

仕事は掃除、洗濯、炊事に子守り、玉村女医の手伝いなどで、給料はなく、住み込みで食べさせてもらいました。しかし、この時代にこんな条件の良い仕事はありませんでした。ところが十月下旬になって、私は発疹チフスにかかってしまいました。そこでは一週間隔離状態で女医から注射や治療を受け、病気が峠を越

した十一月初めに女医さんから毛布二枚、古着二着をもらい、再びエキサイ寮に戻されたのです。エキサイ寮を一度出た人は、二度と戻ることはありません。しかし住むところもなく、すでに厳しい冬を迎え、体力の回復を待つにはエキサイ寮しかなかったのです。

当時、寮には女、子供、年寄りを中心に、人数は半分ぐらいに減っていましたが、毛布と古着は生きていくための必需品でした。

夫の生還

昭和二十年十二月二十四日、突然夫が帰ってきました。夫は牡丹江の収容所に収容されており、噂からシベリアへの抑留が近いことを知り、零下四〇度にもなる厳寒の中、収容者の死体を外に捨てに行くとき脱走を謀ったのだそうです。脱走はしたものの、寒さで凍死したり、虐殺されたり、時には狼に食われた人もあったと聞きました。

そのころになると、開拓団はことごとくバラバラになっており、夫は、私を捜して奉天、通化など捜し歩き、牡丹江から貨車の下に隠れて逃げ帰ったのだそう

です。

それから夫は土方どかたに行きましたが、一日で「殺されてしまう」と言って、その後は古着を売り、煙草巻きをしながら私の持っていたお金で食い繋ぎをし、厳しい冬を乗り越え、春を迎えたのです。

国共戦争勃発

昭和二十一年の年が明け国民党軍と八路軍の戦闘が始まりました。

昭和二十一年三月、エキサイ寮にいた私たちに八路軍から突然、赤紙がやってきました。

その翌日には六十人ぐらいと共に召集され、馬車で通化省の山の中に入ったのですが、その道中、突然国民党軍との戦闘が始まり、銃撃戦となりました。「ピュン、ピュン」弾の飛び交う中、私の隣を歩いていた男の人が、バタッと倒れてしまいました。アッと思い私はその人を起こそうとしたのですが、鉄砲の弾は腹を貫通し、血が噴き上がっていました。

撃たれた人は、「何しとる、放って行かんかい、そんなもん、かもとったら内地へ帰れんぞ」と言い、そ

のまま息絶えてしまいました。後ろ髪を引かれる思いが残りましたが、振り向く余裕ありません。山から山へ、絶えず銃弾の音を耳にしながら、「立ち止まらな、遅れると捕まるぞ」と言われ、足を引きずって歩き続けたのです。

こんな戦闘が断続的に半年近くも続き、十一月ころになってまた寒い冬を迎えました。地図もない無限の大地をどこをどう歩いたのか見当もつきませんが、ある日山の上から遠くにうねる鴨緑江が見え始め、その向こう岸が朝鮮の楚山キョウサンだと聞かされました。鴨緑江の河岸にたどり着くと、川は一面に氷が張り詰め、その川幅は一キロ余りもありますが、そんな川を五、六人乗りの手漕ぎの小舟で渡るといいます。氷は割った後から凍りついてしまい、ようやく五十人ほど全員が楚山に渡ったのはその日の夕方になっておりました。

夫の病氣

満州での日本人は皆、栄養失調になり、「内地へ帰る」この気持ちの支えだけで生き延びていました。しかし襲ってくる病魔にはかないません。楚山に着いて

すぐに夫は発疹チフスにかかってしまいました。夫は薬も医者にもかかれず、水で頭を冷やすだけで「天皇陛下万歳、南無阿弥陀仏」と、時には「内地から船が迎えにきた」などとうわ言を言い続け、そんな中で二十一日目を境に何らの障害も残さず完治したのです。

どんな逆境の中にあっても皆、内地に生きて帰る希望だけは捨てていません。そんな中で発疹チフスを患った何人かの同胞は「船が迎えにきた」「あそこに船が待っている」と言って高熱にうなされながら、吹雪の凍てつく大地に足を向け、二度と還ってきませんでした。

脱走

昭和二十二年春になり、私たちは楚山から通化に送られました。そこでまた皆とは別れ別れになり、夫は苦力として働きましたが、「日本人は我々に食べ物をくれなかった。履物もくれなかった」といじめられ、私は糸紡ぎの仕事が不器用でうまくできず、結局は食事を減らされる拷問でした。そんなことから「こんなことでは内地に帰れない」と二人で仕事をサボりはじ

め、そんな折、また収容所送りとなったのです。

昭和二十二年五月初めにきた赤紙は、二道溝送り、夫は担架隊、私は看護隊でした。いつの時も確かな情報というのはありません。突然やってくる赤紙が、私たちの身分を変えるのです。そのころ、デマが流れました。

「奉天まで出れば、二、三カ月ごとに大連行きの汽車が出ていて、大連から船で内地に帰れる」というもので、夫は「何としても逃げるぞ」と二人のときは言い続けていました。

五月二十日のことです。夫は「今日逃げるぞ、行けるとこまで行く」と、その決心を聞いて、二人で収容所から闇夜に脱走したのです。二日半飲まず食わずで、昼は山に隠れて体を休め、夜はただただ歩き続けました。夜ともなると狼の群れの遠吠えがし、遠巻きにしています。そんな不安な夜を過ごし、三日目の昼ごろ、ガヤガヤという声がし、ちよつと畑から顔を出したところ、五、六人の者に見つかってしまいました。二人とも袋叩きにあった上、夫は殴られて鼓膜を破ってし

まいました。それでも夫は「耳でよかった。足を折られたら内地へ帰れない。今は仕方がないから言われる通りにしよう」と覚悟を決めたのです。二人は二日ほど馬車に乗せられ、「二度と脱走したら銃殺刑だ。まじめに働き、共産主義を一生懸命学習しろ」と二道溝収容所に戻され、脱走は失敗に終わったのです。

次男誕生

今度の赤紙は六道溝行きで、夫は担架隊、私は陸軍第二後方病院看護支援隊でした。このときは、いつの間にか国民党軍の支配下になっており、男は野戦の担架隊に十日間ほど強制労働に出て、帰ってくると、皆、病人のように瘦せ衰えていました。

夫は脱走の罪で監視の身でしたが、ある日靴下を繕っていたところ、国民党幹部の目に止まり、「そんな器用なことができるのか」と聞かれ、幹部の軍服の綻びを繕ったところ、その腕を見込まれ、国民党軍被服省勤務となり、住居は軍幹部の家の離れが与えられ、そこから通勤することとなったのです。

夫の繕い技術のおかげで、生活必需品をはじめ、肉

料理に塩汁、パン、コウリヤン、アワ飯など食事也十分に与えられ、他の日本人から見れば大層恵まれた環境に置かれたのです。

私は看護助手をしていましたが、病院といっても砲弾の穴だらけで、医療器具どころか電気も水もありません。そんな病院に、天然痘や栄養失調からくる結核患者や、次から次と腕や足を失った人が担ぎ込まれてきます。

その傷口にはウジ虫が入り込み、化膿した傷は破傷風になっていきます。

年が明け、昭和二十三年二月二十一日、夜になって四十三歳の日本婦人が産気づきました。夜中に電気もないので、手術の明かりに私がロウソク持ちをしたのです。真つ暗な産室にロウソクの灯は、それだけでも薄気味悪いものですが、その子は逆子で、その上臍の緒を体中に巻き付けていました。

先生は「手術はできるが、明日にはどこへ移動させられるか分からない。子供は仕方がない……」と独り言のようにつぶやいて赤子の頭を切断し、腕を切り、足

を切り離して母親を助けたのです。そしてその後、赤子の手足、首をきれいに縫い合わせ、小さな箱に納めました。私は満州の逃避行で、何度も銃弾の下をくぐり抜け、何十人も人の死に立ち会ってきましたが、お産とは何と大変なことか、と、暗闇に揺れるロウソクの灯の下でふるえ、その情景は今も頭から離れません。

この世の中で絶対見てはならないもの、それを見てしまったような気がします。

私自身もそのころ、お産が近づいており、その手術の翌日、比較的軽いお産で次男が生まれたのです。

長男を亡くしているので夫はたいそう喜び、病院からこっそり息子のおむつにしようとして布切れや包帯を盗んできていました。ところが何回か盗んでそれが見つかってしまい、収容所の独房に六十日間も放り込まれることになってしまったのです。そんなときでも夫は、片時も生きて内地へ帰ることをあきらめません。噂で「病人は先に内地に送還される」と聞くと、次の日からは仮病を使って病人になり切っていました。そんな

ことがバレて、昭和二十三年の冬を前にまた収容所送りとなったのです。

大連へ

収容所では一日二食の食事は確保され、しだいに生活も安定してきていたのですが、昭和二十四年六月初旬、今まで国民党の支配下だったはずが、八路軍が突然やってきて、どこへ行くとも言わず百人ほどが「出発だ」と言って、追いつてられるように馬車に乗せられました。「どこへ行くのか」など聞くのは全くのタブーで、十日余り馬車に揺られ奉天を越えて二十日ほどで撫順に、そして二三日後大連に着きました。大連は戦火が及んでおらず立派な建物が立ち並び、大勢の人でにぎわっていました。

収容所は液止場に近く、旧日本軍の七階建てぐらいの大きな建物で、水も便所もあり、二千人ぐらいが収容されていました。大連では、八路軍による共産主義教育に明け暮れ、「学習が良くてきた者から日本に帰す」と人民服を着た者が説明するのです。しかしどれも話など聞いている者はいません、居眠り、よそ見を

すると、監視者が飛んできて、パシッと平手打ちを食らわすのです。

突然の帰国通知

昭和二十四年九月十七日、朝から何事かざわついています。またどこかの収容所に移動するのか、と思っていたところ、「一同、十九日には日本から船が迎えにくるから、仕度しておくように。ただし間違いがあつたら帰さない」との通知があつたのです。皆はデマには慣らされているのですが、今度こそ本当らしい、と喜びに湧き返りました。

九月十八日、その日はいつもと違って「免疫検査」のもとに、全員が一人ずつプールのような大きな風呂に入れられました。風呂に入るときに隣の部屋から監視されており、持ち物をすべて没収され裸のまま秤に乗せられました。そこでは完全に隔離され、改めて囚人服、パンツ、ズックが支給され、着替えた後、だれもが無一文となつてしまいました。

私は次男が病気で命を永らえるのは無理だと考えていました。それで最後の風呂に入れてやろうと思つた

のですが、女の中国兵は「ショオハイは病気だ、風呂は駄目だ」というのです。それでも私は子供を離さず、無理やり風呂に入れました。しかし次男の様子はますますよくありません。ともあれ女兵士に「何かおしめになる物をもらえないか」と泣いてたのんだところ、くしゃくしゃの八路军の古新聞を持ってきてくれました。それでも嬉しく、おしめ代わりに当てたのですが、その晩は一言の泣き声もあげず、小指の爪ほどの血便を十九回もし、目は閉じたまま夜明けを迎えました。

帰国前の動揺

翌九月十九日、前の夜は一睡もせずに子供の容態を見ていました。午前八時三十分出港との連絡を受けており、七時ごろから皆、岸壁に集まり船を待っています。七時三十分ごろになって水平線の彼方に煙のようなものが見えはじめ、しだいに煙突、次に船体が見えてきました。遠目にも日の丸と赤十字の旗がはっきり目に入るようになると、あちこちから歓声がわき起こりました。

その船足の遅いこと遅いこと、全員の心が浮き立っ

ていました。ところが私の心は曇り、目の前のことは何も見えません。瀕死の状態の次男を抱え、それに私は実家からむしり取るようにお金の工面をさせ、帰国しても親や兄弟に会わせる顔がないのです。

船が港の入口にきたころ、私は夫に「このネネがこんな具合やし、このままここに残ろうか」と言ったのです。夫は、全員が沸き立っている状況で「今になって何言うとする、生きて内地に帰る、ネネは連れて行く」と全く相手にしません。そうしているうちに八時二十分、船首に「高砂丸」と書かれた船が接岸しました。

いよいよ帰国

帰還船「高砂丸」からは、責任者と看護婦が降りてきて、集まっている引揚者に対し「病気の人はいませんか」と呼びかけました。私は子供を抱えて前に進み出ると、そのまま真っ先に一等病室に運ばれ「子供はこちらで預かります」と言われ、次男を船に残して私はいったん降ろされました。

その後、我先にと千二百人の引揚者が船に乗り込みました。私をもみくちやにされながら船に乗り込むと、

看護婦さんがやってきて、「伝染病ではないかと心配したが、ひどい栄養失調で、しばらくすれば元気になる」と聞かされたのです。船の中で死者が出ると遺体を海に投げ、汽笛を三回鳴らすのですが、この子もそうなるでも仕方がないと思っておりました。

昭和二十四年九月二十四日、船は無事、舞鶴港海軍基地に入港しました。上陸すると、港の栈橋から婦人会の人たちが真っ白の割烹前掛けにたすきを掛け、一人、一人に「長いこと本当にご苦労さまでございました」と長い長い列を作って、深々と頭を下げ出迎えてくださいました。

町には若い女の子が髪を赤く染め、洋服を着て、素敵な靴を履き…そして家々からは、「あの子可愛いやカンカン娘、赤いブラウス…」とラジオからの声が聞こえてくるのです。そして本当に日本に帰った、あの満州から生きて帰ってきた、と実感したのです。それでも次男の収容先の病院では、中絶のための列ができません。帰国した人たちも皆喜びに浸っているわけではありません。途方に暮れる多くの人たちがあり、私たち一家

にとつては帰国後も厳しい苦難の道が待っていたのです。

【執筆者の横顔】

表しげさんは大正十二年六月二十五日氷見市の農家の七人兄妹の次女として生まれました。夫與三松さんは氷見の山奥の鉾根で生まれ、手先が器用で将来は商売をする夢を抱いて満州行きを決意し、昭和十六、七年と二カ年現地で事前訓練を受け、しげさんと結婚、先遣隊として荏河開拓団に入植した。

十八年九月にしげさんは出産のため一時帰国したが、男の子は十三日目で急死。しかし満州の土地で骨を埋める固い意志で結婚したので、親族の人たちが止めるのを振り切り、十九年四月本隊八十人と共に再度渡満した。団の建設は順調に進んだが、御主人は五月二十三日召集。しげさんは与えられた田畑の耕作のため馬を一頭購入して頑張った。

秋の収穫を楽しむ矢先、終戦となった。八月十九日から逃避行となる。安東収容所で突然御主人がハルビ

ン捕虜収容所を脱走して再会できたが、喜びも束の間、国民党に捕まり、使役。その後代わった八路軍から二回出勤命令を受け、御主人は担架隊、しげさんは看護隊、こうして勤務中、次男克好さんを出産した。昭和二十四年九月突然引揚げ命令。

しかし引き揚げたが住む家、仕事はなく苦勞したが、ようやく引揚者住宅に入ることができた。御主人は薦職をしていたが、あるとき、三、三〇〇ボルトの高圧線に触れ重態となり、数年間仕事につけない状態、また引き続き交通事故の災難と続いた。だが細工仕事を好む性格から会社から仕入れた材料を家で製作、納入するようになり生活も徐々に安定した。しげさんは根性のある人で、会社に女工として十数年、引き続き十年余り清掃婦として働いた。

昭和四十五年には住宅も新築、苦勞して引き揚げてきた次男克好さんは警察官に採用される。引き揚げ後生まれた長女も嫁ぎ、孫四人もできた。しかし夫與三松さんは終生健康体とは言えず十数年間の入院生活を送り、平成四年（七十歳）で亡くなった。

現在は、幸い健康に恵まれ、次男克好さんは職業柄転勤が多いため、市宮住宅に一人で居住、年金生活をし孫たちの家を訪れたり、元気で楽しい毎日を送っている。

（富山県引揚者団体連合会

会長 砂原 外之）

今も癒えぬ戦争の傷跡

石川県 北崎 可代

大正生まれの私たち世代の多くは、物心ついてからこれと言う楽しい思い出もなく、成長したころは戦争の時代に突入していた。

昭和六年九月十八日の柳条湖事件、また昭和十二年七月七日蘆溝橋事変などあり、国内では失業者が溢れ、農村では次男、三男の耕す土地はなく、生きるために都会に出ても食は得られず生活苦に悩んでいた。その当時、日本政府が積極的に勧めたのが、満州国へ満蒙